

葛城

被爆体験記
(3号)



庄原市山内地区原爆被害者の会

葛 城

かつらぎ
被爆体験記
(3号)

庄原市山内地区原爆被害者の会



被爆者の救護体験を聞く山内地区原爆被害者の会のメンバー
(2003年9月12日 中国新聞)

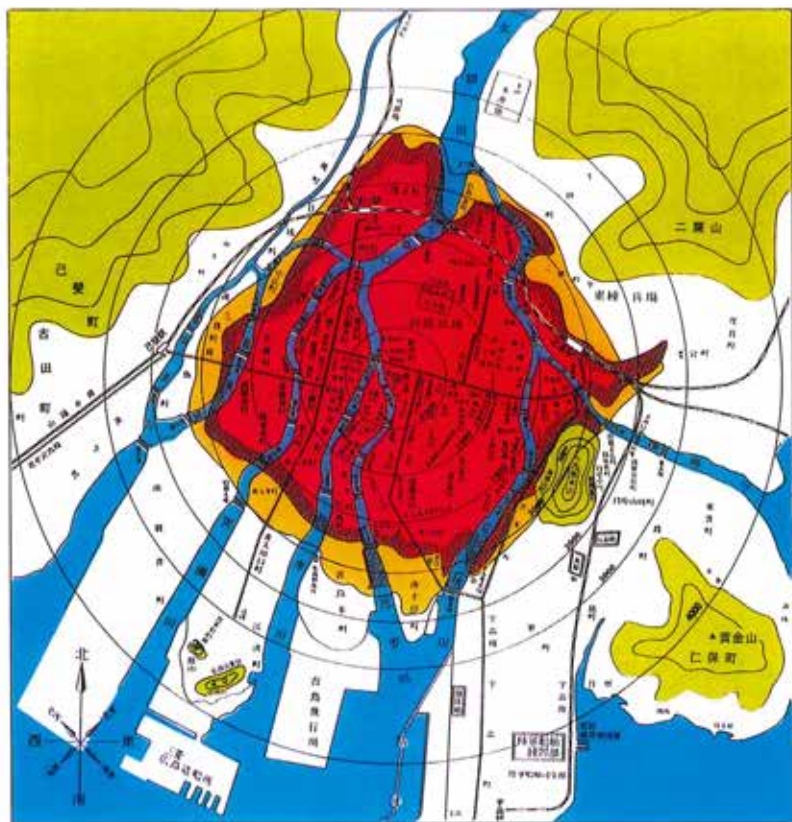


病棟が開設された山内西国民学校跡で、当時を振り返る久保好秀さん
(左)と山本智洋さん。現在は、山内小学校のプールになっている。
(中国新聞社提供)



昭和22年10月4日 米極東空軍撮影
山内駅から山内小学校まで

原爆被害の概況



凡例

	全壊区域
	建物倒壊区域
	川及び海面
	山林



車掌当時の小田貞枝さん



山内駅に立ち、当時を振り返る
小田貞枝さん（2003年8月6日）

目次

被爆体験記「葛城」第三号最終編にあたって	1
被爆体験記「葛城三号（完結編）」の発刊に寄せて	3
山内病棟での死亡者の茶毘と慰霊法要	5
被爆者を運んだ汽車の車掌でした	8
芸備線で運ばれて山内へ	16
山内病棟救護の思い出（座談会）	21
若い人々に伝えるのが責務	28
こどもたちに話つづけた被爆体験	32
広島救援動員者の見たヒロシマ―山内の老人クラブの報告座談会から―	37
爆心地を走り抜けて	47
急死を逃れて	49
山内原爆被害者の会活動方針	51
おわりのことば	54

山内地区原爆被害者の会 事務局長 山本 智洋

写真 副編集長 土井 昭二
 題字 会 長 加藤 照明

被爆体験記「葛城」第三号最終編にあたって

山内地区原爆被害者の会 会長 加藤 照明

広島市に世界最初の原子爆弾が投下されて、早六十周年を迎えようとしています。

思い起こせば、一瞬にして数十万の尊い命を奪い、三日三晩火の海と化しました。このような悲惨な光景は私たちの脳裏から一生消え去ることはありません。生き残った被爆者は、特異性の爆弾により、肉体的にも精神的にも、一生悩み続けながら生きていかなくはなりません。

山内地区原爆被害者の会は、平成十三年十一月に結成し、被爆体験記の発行や体験の継承活動、山内地区原爆慰霊祭への協力などさまざまな活動を通じて参りました。

平成十四年七月には、当時の救護の貴重な活動記録を収録した葛城一号、その翌年には葛城二号を発刊致し、報道機関のご協力により、東北地方や関西方面の方にも読んでいただきました。またさらには広島大学原子爆弾研究所・広島市平和資料館・広島県立図書館・広島市立図書館・広島市社会局・広島市役所・長崎追悼記念会館・東京NHK国際局等々へ寄贈しました。

しかしながら現在、なお、劣化ウラン弾等の後遺症による、白血病が発生していることは世界人類の滅亡につながるものだと思います。

私たちは、このような悲惨きわまりない実態を、貴重な記録・資料として後世に継承しなければな

らないと思います。そして再びこのような過ちを繰り返してはならないと、全国民、否、世界の全ての人々に訴えていきたいと思えます。

今日、被爆者の高齢化が一段と進む中、要介護者が年々増加の一途をたどっています。今後とも法律に基づく行政支援の充実と核兵器廃絶、世界人類の恒久平和の確立を重ねて心より念じます。

葛城三号も教材として市内の小・中学校や、ご希望があった学校にも寄贈させていただき、生涯教育の一環として原爆の恐ろしさをまなぶ資料としていただければ幸いです。

最後になりましたが、前市長八谷泰央様、現市長滝口季彦様には葛城第一号、第二号、第三号の発刊にあたり、大変ありがたいお言葉を頂戴し、また地域の多くの皆様方をはじめ、いろいろな方面より貴い体験をご投稿、ならびに関係資料のご提供を賜り大変ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

また、日夜を問わず編集会議、資料収集にご協力頂きました編集委員の方々、報道関係者の皆様のご協力によって葛城の完成を見ることになりました。改めてありがとうございます感謝申し上げ完結編の言葉と致します。

被爆体験記「葛城三号（完結編）」の発刊に寄せて

庄原市長 滝口季彦

昭和二十年八月六日、世界最初の核兵器である原子爆弾が広島市に投下され早くも五十九年が経過します。

原子爆弾は、一瞬にして十数万人の命を奪い、生き残った被爆者も現在全国で一二万人、庄原市においても一〇〇〇余人の方々が原子爆弾の特異性により、長年にわたり社会的・医学的・精神的後遺症に苦しみながら、生涯悩み続けなければならない実情にあります。

山内地区原爆被害者の会は平和への願いや被爆体験を後世に残すため平成十三年十一月に結成され、被爆体験記の発行や体験の継承活動、山内地区原爆慰霊祭への協力などの様々な活動を続けておられます。

平成十四年七月には、当時の献身的な救護の貴重な活動記録等を収録した被爆体験記「葛城」が発刊され、翌年も第二号が発刊されました。そして、今年は完結編となる「葛城三号」が発刊され、この体験記は原爆の悲惨な実態を貴重な記録、資料として後世にまで継承する、誠に意義深いものと感銘いたします。

当会の会員の皆様は原爆投下後、軍関係で被爆負傷された方々への手当てや看護、そして手当ての

甲斐なく犠牲となれた方の埋葬など生涯わすれることのできない悲惨な体験をされました。このことは、後世に残すべき貴重な体験でもあり、過ちを繰り返してはならないとの市民全体の平和への願いにもつながるものでもあります。

今日、被爆者の高齢化が進む中、ひとり暮らしや寝たきり等の要介護者が年々増加するなど、その環境は変化しつつあります。

今後、「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」に基づき、救護行政の一層の充実さらには、核兵器廃絶と世界恒久平和の確立を願うものであります。

この被爆体験記「葛城」が、貴重な被爆体験記として後世に引き継がれ、人類恒久平和のための情報資料として益々有効に活用されますことと、同会の更なるご発展を祈念して発刊に寄せてのご挨拶といたします。

山内病棟での死亡者の茶毘と慰霊法要

山内地区原爆被害者の会 副会長 土井 昭 二

昭和二十年八月六日、広島に原爆が投下されました。

多くの被爆者があり、病院が不足したため、広島第一陸軍病院の庄原分院山内病棟（山内西国民学校西側旧校舎）が設置されました。ここに、二七〇名の兵隊さんや看護婦さんが収容され、重傷者は一階に、比較的軽症者は二階に入院されました。

これらの方々を藤高院長をはじめ、軍医、衛生兵、看護婦、それに加えて、地元の国防婦人会、女子青年団など多くの方が交代で食事、洗濯などの手伝いを物心両面で、献身的な協力がされました。火傷がひどく、男女区別がつかない重体の方が多くて、一日に数名が死亡されました。

そのため、地区常会長から依頼を受けた消防隊の方、青年の方が一日五人程度出夫して、まず、山林の木を切って割り木を作り、始めは、現在の慰霊碑のあるところから八〇メートル位上の平地に割木を積み重ね、枝木も置いていたいを焼く準備をしました。

準備されたところへ、遺体を担架で運び、割木の上に一度に数人くらいを並べ、薬師寺住職馬場清範上人さんの読経により、火葬に付されました。

その後、今の慰霊碑のある場所に移動して、全部で八八人が茶毘に付されました。

他の病院に転送されたり、自宅に帰られたりして、九月三十日には山内病棟は閉院されました。翌年（昭和二十一年）の盆から、地元大歳婦人会の横谷ハルコさんを中心に看護・炊事と物心で尽力された婦人会の方々をはじめ、地区民の協力で、最初に火葬していた所に残った小さな骨を現在の慰霊碑のあるところを集めて、そこに墓石を置き馬場清範上人様の読経により法要が毎年行われていました。

その後、横谷ハルコさんを中心に慰霊碑建立の話が持ち上がり、山内社会福祉協議会、庄原市、市内各団体、遺族の方、そして、山内全戸に志をお願いして歩き、なんとか建立の費用を集めることができました。そして、荼毘に付された土地の所有者である市川育雄氏より無償貸与を受け、昭和三十三年三月二十一日、慰霊碑除幕式となりました。

以来、原爆投下の八月六日、八時一五分に山内西社会福祉協議会、地区婦人会が主体になって、遺族の方、各団体の方、多くの地区民が参加し、区内五寺の住職様をお迎えして法要を行ってきました。

法要当日までに、老人クラブ会員による慰霊碑周辺の草刈等の大掃除を実施し、当日は社会福祉協議会理事さん全員で、果物、菓子、お花等を供えて、周りには白黒の幕を張って式場を整え、盛大に法要を行っています。法要終了後は、公民館で、婦人会の皆さんの手作り食事を遺族と一緒に食べながら、当話を話し合ってきました。

ここ十数年前からは、八時一五分の法要開始では、遠方の遺族の方は、時間的に参加することが困難であることを考慮して、午前十一時に開始しています。

そして、現在は、山内小学校、水越小学校、老人ホーム相扶園の方も参加されます。

児童・園児のつくった多くの折鶴も供えられます。

また、地元、國川 勇さんご夫妻が作られた八八個の灯明が献灯され遺族の方等大変喜ばれています。

このようにして、原爆犠牲者の慰霊法要が、核兵器の廃絶を願って今日まで続けられています。このことが子々孫々まで続くことを願っています。

被爆者を運んだ汽車の車掌でした

広島市 小田 貞枝

広島から参りました小田と申します。今日は原爆のことを話して欲しいという館長さんのお招きで、こちらに來させていただきました。このようなことを皆さんにはつきりわかるように話せるか、心配でしたけれど私は、「語り部」ではありませんので、あったこと、思ったこと、感じたことを皆さんにお話して共感を得られたらいいと思っただけで一生懸命話したいと思えます。よろしく願います。私は、昭和二十年八月五日の晩は九時四五分の最終便で三次までかえりました。すでにその時は、警戒警報がはいっておりまして、広島街はすぐに電灯を消して真っ暗になりました。また明日、広島街に來ればいいわと思いつつオグランプをつけたままの最終便で帰りました。

三次の宿泊所に泊まっていたのですが、八月六日の朝ピカッと光って、ポーンと音がしました。何事かな？ぐらいに思っていましたら、間もなく、今朝、広島に爆弾が落ちて今どこやらが焼けているらしいということを知りました。

広島市内にあった列車は全部原爆でやられてしまいました。三次や吉田など郊外にあった列車が市内に入って八月六日の午後から罹災者を運びました。

汽車は矢賀の駅でユーターンして帰らないといけませんでしたが、矢賀の駅ではホームで沢山の人を焼いておられました。

私も若いときでしたから感傷的になりまして、本当に悲しかったです。

たくさんの罹災者を汽車に乗せるのに、みなさん手伝っておられました。足の踏み場も無いほどでした。たくさんの人だったので、全部を支えるわけにもいきませんでした。

四人がけの椅子も一人ずつの使用になり、二人は座れませんし、通路は半死状態の重傷の方ばかりでしたから、もしもしと声をかけても全然応答はありませんし話しかけても動くだけで水が飲みたいと言われるだけでした。

一番印象にあるのは、服の柄がこびりついた皮膚がぶら下がって、傷にゴミや土がいっぱい入っていても、本人は意識が無いのですから痛いことも痒いこともない様子でした。

私はそれを見てほんとに眼をそむけました。気の毒でかわいそうで、でも何もしてあげられません。でした。

かわいそうにこの人たちは何を悪いことをしたのか、何も悪いことをしていないのに、とすぐ思いました。何でこんな目に遭わないといけないのか……。

大勢の人をみて、私は「こんなにして日本は戦争に勝てるのかね」といったら同僚が「しつ、憲兵隊の耳に入ったらおおごとよ」と、止めたのを憶えています。そんなことを言ったらいけないと言えません。

それでも、こんなにたくさんの方が死にそうなのに、日本は勝てるのだろうか、毎日、毎日たくさ

んの人を運ばないといけなかったのですから：

それから間もなく七日・八日ずつとつづいて山内とか庄原とか駅に、半死状態の人を運びました。七塚とか三日市は無人でしたから、無人でない駅といえば山内・庄原・西城・熊野でした。運んだのは四、五日でした。

半死状態の人を庄原駅まで運んできたときに紺色の服を着た看護婦さんがたくさんおられたのを憶えています。その人たちが被害者と一緒に降りました。

駅ごとに患者さんを降ろす：ずつと毎日そんなことをしていました。

それが済みましたら、福塩線の上下駅まで行きました。それも三次の駅についてすぐ行くのではなくて、たくさん人が列車に乗るのを待つてから、三次駅を出発しました。ふだんは列車のダイヤが決まっていますでしたが、このときばかりはダイヤもなにもありません。たくさん人が集まったら乗せて次の駅まで行かなければならないというような乗務を一週間ぐらいしておりました。

その時初めて、重油という言葉を知りましたが、広島駅ではホームで死んだ人を、少し幅の広い鍬でしたがそれを使って線路の上に引つ張りおろして重油をかけて火をつけて、また、引つ張りおろして火をつけるということをしていました。

生身ですから重油をかけないと早く焼けない。早く焼いてしまわないとたくさん死体でしたから：人の世界ではなくて今思えば、想像もつかないような事態でした。重油は機関庫にあったのだと思います。

男の人はみんな戦争にいつて職場には、高齢の男の人しか広島駅にもおられませんでした。

私たちは、矢賀と広島の間にある引き込み線まで倒れた人を運んで三次まで乗せていきました。そして三次で福塩線に乗る人と芸備線に乗る人に分けていました。ですから山内・庄原の人は一緒に乗せてきました。

普通列車と貨物列車で運びましたが、貨物列車には重傷の人、普通列車には比較的元気な人が乗せられました。私は山内に着いた普通列車に乗っていました。貨物列車が使われたのは一時的だったのではないかと思います。あれは戸坂から二部隊の兵隊さんを運んだのではないかと思います。

矢賀の駅から乗せて、山内駅に着くまでには、お茶を下さい、水を下さいと引つ張られるのですが、水をあげた記憶がありませんし、乗務に必要な物の入ったかばんや誘導に使う赤・青の旗は持って乗りましたが水を持って乗った記憶がありません。水を飲ませてはいけないとお医者さんが言われたという話を聞いたことがありますから、それで水を持って乗らなかつたのかもしれないです。

駅について「もしもし着きましたよ」といっても応答がなかつた人もありました。

最初はかわいそうだと思いますが、おしまいには慣れつこになって、どうしようもない、仕方ないという感覚になりました。それが一両ではなくて六両ですから。多いときが六両で普通が四両、時間的に人が往復しないときは二両で行きました。

上下の駅に行くときには、やはり罹災者をたくさんためて上下の駅まで行きました。上下の駅の前に旅館がありました。戦争中でしたので国鉄が借り上げて乗務員の宿泊所にしていました。

上下の駅で患者さんを降ろすとき、今のように電灯がつけられませんか、足下だけを照らす懐中電灯をつけて車内を歩いていました。そしたら暗闇でうずくまっておられるので「もしもし着きましたよ」と声をかけて起こしても返事が無い；そのまま死んでおられたのです。

私は「駅長さーん 駅長さーん 来てくださーい」とすぐ呼んで、看護婦さんや駅の人が死んだ人を抱えて降ろしたという経験もあります。

兵隊さんの服の色をカアキ色といいますが、色が全然ないのです。土とか泥とか光線を浴びた瞬間焼けたかどうかしたのでしょうか、色が無くて車のシルバーの色でした。

私は何でみんなこんな目に遭わなければならないのか；何の悪いこともしていないのに；だれがこんなことをするのか；だれがしたのだろうかと思いましたが；

五日の晩にはこれまでどおりの広島の前を見ましたが、六日には街がありませんでした。

矢賀の駅からおりに広島駅にまわると、駅は壁面と囲いだけありまして、天井もなにもありません；ガラスもありません；私は泣きました。駅舎もとんで、昨日まで仕事をしてきた出札口もなにもないのでから。

六日・七日、広島駅には人も何もいなかったです。怖かったです。駅前の電車道の右手に信用金庫かなにかの建物があって、荒神市場に行く道がありました。ここにもなにもないので。

ただ、タイル張りの下から壊れた水道管の水が吹き出ていました。ここに風呂があったんだ、ここが台所だったんだと思いました。なにもない中であちこちで水道が破裂して水が噴き出していました。

その時私は、悲しいけどもうこれでおしまいなあとおもいました。だれもいないのですから、人に聞くこともできませんでした。

なぜ戦争になったのかは知りませんでしたけど、こんな戦争はいけないとおもいました。

私は、たまたま八月五日に帰って、かろうじて六日の難を逃れましたけどそれは、神様が、どうかこのことをみんなに伝えて下さいという、そのために私は生かしてもらったのだと思います。

私はたまたま最終便で三次に帰りましたから助かりましたが、広島に泊まっていたあとの人たちはみんな死んだのですから；それはみんなに伝えるために命をもらったのだと思いました。

汽車の中も通路が歩けません。まるで魚市場で箱詰めされる魚が無造作に並べられているような印象でした。駅のホームもそうでした。貨物車に人も乗せなければならぬから積む、そんな感覚だったように思います。もう少し丁寧に頭からそろえて；といった余裕がなかったと思います。

女の赤ちゃんを連れた若い女の人が、「帰るところがないから汽車の中に泊めてもらえませんか」といわれたのです。

しかし、汽車の中に泊めることは出来ないのです、とりあえず降ろして私の下宿に連れて行きました。「どこにおられましたか」と尋ねましたら「高野町」といわれました。庄原出身のご主人と一緒に、東京（横浜）にいたけれど、ご主人に招集がかかり二部隊に入隊するから一緒に疎開してきたといわれました。でも庄原では農業も何もわからず、精神的にまいっておられたようで、家をだまってきたと言われていました。

当時は証明がないと汽車には乗れなかったのですが、その人も証明がないのにご主人に会いに行くと言って出たためもう帰ることができないということだったのです。私は、心配しなくても大丈夫、私が乗せてあげるからといって乗せてあげていたのです。

その人が、八月五日にご主人に会いに広島に行くといわれ乗せてあげたのです。私は、帰るのなら五日の晩と一緒に帰りましょうといって別れました。

それじゃあ帰ります。といわれたのですが、五日の晩ホームの椅子に座って、ホームにおられるのです。「ちよつと、帰らないと」と声をかけたら、二部隊に行ったら主人が公用でるので六日の朝帰ると言われたので、ホームに泊まるといわれました。

結局、この親子は、原爆で亡くなりました。駅のホームで赤ちゃんを連れたままでした。この親子もホームの下に降ろされて焼かれました。私は本当にその時のことがいつも頭にあります。

あのと、無理矢理引つ張って乗っていたら助かったんだ、悪いことをしたと今でも思っています。それと、中学生の男の子もさんが建物疎開に行くのだといわれ、それがまた汽車の中で亡くなりました。

山内でもたくさん人を降ろしましたが、多くの方が亡くなっていました。動かない人が多くあったと覚えています。

重傷の人は、「車掌さん水下さい」とか「うーん」という言葉だけでした。

原爆の話を知ったとき、私も被爆した人と同じ心境です。かろうじて助かりましたが、いつもそれを

思っていて、ずっと元気でいて子どもたちにそれを言わないといけないと思っています。

芸備線で運ばれて山内へ

神石郡 木本雪枝

私は、父の仕事の関係で広島に住んでいましたので宇品で小学校を卒業しました。

当時は、女学校などの上の学校に進むのは駄目だという意識が先生をはじめ、私の周りにはありませんでした。

戦時中の教育ですから：勉強するよりは軍需工場で働くのが良しというのが当たり前でした。

私の学校からも、義勇軍に二〇〇人くらい行きましたし、女の友だちの中にも満州に渡った人がいました。

みんな元気で還ってきただろうか、今頃になっておもいます。

そんな中、私も学校を卒業してから一、二年、比治山の下にあった被服廠（廠Ⅱ工場）に行きました。

被服廠がおもしろくなかったので産業奨励館（現在の原爆ドーム）に相談にいきました。

すると「来年四月に陸軍看護婦というのを募集するから受けて見ますか。」と言われ、「募集するなら行きます。」と言うことで両親は反対しましたが、「面接試験を受けて四月から原爆が落ちる八月まで、西町兵舎という初年兵を教育するところがありました。そこで勉強していたのです。」

八月六日当日は、早朝の空襲警報で防空壕に避難していましたが、解除になって受け持ちの看護婦さんたちが「空襲警報が解除になっているから、今のうちに急いで朝ご飯を食べなさい」と言うことで、みんな急いでご飯を食べました。

勉強が始まる前で、当時、消毒という科目があつて、当日は試験の日だったのでみんな一生懸命勉強していました。

私は、南京虫にかまれて化膿した痕を治療するために治療室にいました。

そのとき写真を撮るときはマグネシウムを焚いたような光が目に入りました。

窓が倒れかかってきたのでとっさに顔を覆ってかがみこみました。

そのときは原爆ということは解らなかつたのですが、やられた！と思いました。

B 29が一機、今はエノラゲイというのですが敵機が一機きていました。

窓が倒れかかってきたと思つたら、建物はぺちゃんこになっていました。中には「お母さん、お母さん」という人があつて、瓦礫の下から掘り起こして、引つ張り出して、私も二、三人助け出したのを覚えています。

爆心地から二キロメートルほどのところに第一陸軍病院があつて西町兵舎がありました。当日は入隊の日だったためにたくさん兵隊さんが亡くなりました。

靴は履いていないので裸足で、当時は看護衣が白だと目立つということでヨモギの汁で青い色に染めたものを着の身着のまま、何も持たずに、それでも、月給でもらつた五円を財布に入れたのを持っ

て戸坂に歩いて逃げました。

六、七人で逃げたとおもいます。どちらの方向に逃げたらよいか分かりませんが、陸軍病院の看護婦さんや患者さんが逃げてこられるのを観て、あっちの方は駄目だと思いい川岸づたいに戸坂に向かって逃げました。

途中、川を渡らなければならぬところがあり腰まで浸かって川の中を歩きました。咽が渴いて、たまらずに川の水をすくって飲んだのを憶えています。川の向こうには火の手があがって町が燃えていました。

皮膚がはがれたり、火傷をした人がやっと歩いておられました。

私たちの学校には一〇〇人いましたが、亡くなったのは原爆が落ちたときに即死した人がひとり、後に原爆症で亡くなった人が四、五人です。

中心地からずっと、奥へ奥へ逃げたのが良かったのだと思います。

戸坂の小学校までは一日かけて歩きました。着いたのは夕方でした。

小学校は被爆した人でいっぱいだったと思います。比較的元気な私たちは校舎の中には入れず、筵を敷いて寝るわけにもいかず、毛布を一枚もらって、近くのお寺に連れていってもらい、防空壕の上で寝ました。きれいな月がでていたのを憶えています。夏でしたからそのくらいですんだのでしょうか。

三日目に父がむすびを持って探しに来てくれました。食欲が無くてご飯が全く食べられず、何も食べていなかったときでしたから、海苔を巻いたむすびでしたが、そのむすびのおいしかったのが忘れ

られません。

当時皆実町にいた叔父が父に、私がいたところは被害がひどかったので、生死は判らない…もしかしたら死んでいるかもしれないといったそうです。

死んでいるかもしれないけれど確かめなければならぬと思った父が、あちこちで西町兵舎にいた看護学校の生徒はどこに行ったか尋ねたそうです。尋ね歩いているうちに、戸坂の小学校に避難しているらしいと聞いて、探して来てくれたのです。

それから戸坂の駅まで歩いたのだと思いますが、芸備線に乗って山内駅に、九日の夕方着きました。駅から一キロメートルほど離れた臨時の陸軍病院だった山内西国民学校まで、乗り物に乗った記憶がないので歩いていったのだとおもいます。学校に着くと校舎の前で、白衣を着た兵隊さんが出迎えてくださったのが記憶に残っています。

火傷をした人がたくさんおられました。私は、原爆にあったときには顔中傷だらけでそこからの出血で血だらけでしたが、ひどい打撲で旧校舎の二階で一週間ほど寝ていました。

一週間くらい休んで起きられるようになってからは、看護婦さんから手伝うようにいわれ、患者さんの治療を手伝いました。後になって、傷口に蛆がわいたというのは聞いたことがあります。私はいえませんが。

入院中の食事などは地元住民のみなさんがお世話をしてくださいました。みなさん良くしてくださいました。

そこで一ヶ月くらい過ごして、自宅療養ということで家に帰りました。お風呂は一度も入った覚えがありません。きがえも被爆したときのままで家に帰るときに、上野公園の近くに疎開していた妹二人が着替えを持ってきてくれてそれに着替えて庄原にかえりました。神石には福塩線でかえりました。その後、保健婦の資格をとり結婚しました。爆心地から近いところで被爆したのに、よくみんな助かったと思います。私の命があるのは、祖母が信仰心の篤いひとでしたから神様に祈ってくれたおかげかなと思います。陸軍病院の跡につくられた慰霊碑にはお参りしました。山内に慰霊碑があるということもきいています。思い出の場所ですから機会があればぜひ一度行ってみたいと思います。

山内病棟救護の思い出（座談会）

出席者

救護体験者 奥田ぎしのさん 杉山サオノさん 横谷ツユコさん 門田ヤスコさん
 被爆者の会 加藤 照明会長 土井 昭二副会長 山本 智洋事務局長
 福山 権二幹事 坂田 一浩中国新聞庄原支局長

（山本）当時のことで憶えていらっしやることをお話下さい。

（奥田）私は原爆にあつて、焼けて帰った弟の嫁を家の蚊帳の中で二十日ほど看病していましたからここには来ていませんが、被爆者の皆さんが駅からここに来られたときの様子は良く憶えています。当時店をしていたのですが、家の裏の手を伸ばせば届くくらいの距離の所を担架で運ばれる人を見ました。あまりにもむごい姿でしたから、何も咽を通らずとうとう夕食を食べずに寝たのを憶えています。

（杉山）私も子どもが小さかったので、毎日手伝いに来ていませんが、今日は被爆者の人たちが駅に着くからということで駅まで迎えに行つて、国民学校まで一緒に着きました。

（福山）杉山さんも運ばれたのですか。

（杉山） はい、あのときは馬車も出たし歩く人もおられました。

（福山） 庄原の駅では汽車から降りた被爆者をみたひとが後ずさりしたというのですが、皆さんは被爆者の方をみてどう思われましたか。

（山本） 声を聞くまでわかりませんでした。男の人の胸も女の人の胸もふくれてみただけではわかりませんでした。

（横谷） それに肉が下がっていたのではないのでしょうか。

（山本） あのと私とも担架で運んだのですが奥田さんの家の前を通って運んだ人もおられたんですね。二百人くらい運びました。私は松村さんの所を通りました。歩いてきた兵隊も六十人ほどおられました。

（奥田） はい、おられました。服がぼろぼろになって裸同然の…それはふためとみることができないような悲惨な姿でした。

また、あの当時ですから名前も何も聞いていませんが、被爆した人を遠くから捜してこられて私の家に泊まって帰られた人もおられました。捜してもここには来ていないといって帰られた人もおられました。

（山本） 当時女子青年団で手伝いに来ていた私の姉から聞いた話ですが、長崎に原爆が落ちてお母さんが亡くなったという娘さんが、お父さんがここにいると聞いて尋ねて来たけれど、そのお父さんも亡くなったというようなこともあったそうです。

（横谷） 私は仕事があつてあまり手伝いには来ていませんが、ここにおられた若い二人の中尉さんに食べさせて欲しいと助役さんが毎朝卵を持ってこられるのを、汁碗にわって醤油を一、二滴たらしてかき混ぜたのを持ってきて二人に飲ませてあげていました。二人のうち一人は良くなられましたが、一人は亡くなられたと聞いています。

毎朝一個か二個でしたがあのころの栄養のあるものといえば卵ぐらいしかありませんでしたし、あまり食べることができなかったのだと思います。

何もなかったのでみんな梅干しを出していました。

（山本） 門田さんは看護にきておられたのでしょうか、その時の様子を聞かせてください。

（門田） 寝ておられる被爆者の背中に蛆がわいていました。それを取るのにしたに敷いてあるシーツといつても地域の人たちがおしめや浴衣をほどいて縫い持ち寄ったものでしたが、それを交換するのに患者さんを横向きにしなければなりませんから、痛い痛いといわれるのを三人で一組になって、一人は頭、一人は足を持って横向きにして一人が敷物を引っ張り出した新しいのを敷いていました。

薬といつても何もありませんから赤チンを塗っていました。

汚れた敷物は向こうの川に持って行って洗濯していました。当時はまだ橋はなくて大きな飛び石が幾つかありましたから、蛆を流した敷物を石けんはありませんから、石の上で踏んだら、石にたたきつけたりしてきれいに洗って干していました。毎日蛆がわくのできれいにしな

いといけませんでした。

（福山） たくさん患者さんがおられたのに一人ひとりみんな蛆を取っておられたのですか。

（門田） そうです。私一人ではなく手伝いに来た人がみんなで手分けをして交換していました。背中の蛆を箸で取ったりもしていました。

患者さんの中には元気な人もおられました。何を叫んでおられたのかわかりませんでした。夜になると大きな声を上げて叫びながら運動場を走り回っておられました。それを聞きながらかわいそうにとおもいました。

それから、ずっとでは無かったです。傷のあまり無い人が二、三人お風呂に来ておられたこともあります。

わたしの家にもここに来ておられた人のご両親が三組くらい泊まっておられました。

（記者） 陸軍病院の看護学校の名簿を調べたときに、門田さんという方のお家でお世話になったという方が、広島におられました。

（門田） 口和の人も私のうちに泊まっておられました。お茶碗なんかも家からもってきて時々家に帰って食べるものを持って来てそんなのをもらったりあげたりして看病しておられました。

（山本） 食事を運んだときの様子がわかればと思うのですが、皆さんは食事は作っておられなかったのですか。

（門田） 私たちは作っていません。他の人が交代で作っておられました。

ご飯を食べたくても、スプーンですくって食べさせてあげてもきちんと飲み込める人と、飲み込むことができず口の中からこぼれてしまう人がおられました。普通のご飯を食べる人もおられました。水が欲しいと言われるので口の中に入れてあげても全部だたらとこぼれて飲むことができないのです。

（加藤） 毎日沢山の人が亡くなりましたが、いまの慰霊碑のところを二カ所で焼いていましたか。

（横谷） 亡くなる人が一人ではなく何人も何人もでしたから、夕方になると風向きによっては人を焼く煙が流れてきて、それは強烈なおいでしたから焼く場所を変えたので二カ所で焼いたのでしょうか。

一人ではなく沢山の人がなくなるのですからどうやって焼くのだろうかと思いました。

（加藤） 畑のようなどころに並べて焼くのですから、このあたりの木や竹がずいぶん少なくなりました。たでしょう。

（横谷） 死体を並べてまたその上に重ねて一度に焼くのですから、名前を書いた紙を木に順番にさしてだれの骨かわかるようにしていました。大工さんが骨箱を作って下さっていましたがたくさん人が亡くなるので作るのが間に合いませんでした。

ですから骨箱も小さいのを作っておられましたから、お骨をひらつてもいくらか入らなかつたと思います。

（土井） 私もあとでみたのですが、雨が降れば白い骨が出てきたりしていましたから、慰霊碑を建て

て供養しようということになってこの地区の婦人会の人が中心になって資金を集めたりされました。

（杉山）私も資金を集めるために水越の方に行きました。

（福山）水越の方では八月六日の朝外で草取りをしていた人がドーンという音を聞いたという人がおられました。皆さんはいかがでしたか。

（奥田）響きましたよ。ガラスがビリビリと響きました。あのとき落ちたのだとおもいます。

（福山）当時子どもを背負ってここに手伝いに来たという人がおられるのですが、憶えておられますか。

（門田）いいえ、子どものいる人は手伝いに来たらいけないといわれていましたから、記憶にないです。私も小さい子どもがいたけれどおばあさんがいたので、子どもをみてもらって手伝いに来ました。

（土井）私の知り合いは子どもを背負って川で洗濯をしたといっていました。

（門田）私たちでも洗濯は大変でしたから子どもを連れての洗濯は大変だったでしょうね。

患者さんの包帯は、浴衣をきって縫ったりおしめをほどいて縫ったのを持って行ってあげなさいということから家から持っていっていました。

皆さんぼろぼろになって帰って来ておられるので全部蛆がわいていました。

（奥田）膿がだらだらでてガーゼをうぐとぎになかなかとれません。ガーゼに着いた膿も煮え

湯をかけないととれないぐらいの厚みがありました。ガーゼも足りなかったので膿を落として何度も使っていました。

皮膚がウサギの皮をはぐように皮膚の下の血管ごとはがれていました。血が噴き出してました。手も骨が三カ所くらい折れて皮がぶら下がっていました。蚊帳の中が臭くてたまりませんでした。ここには蚊帳がなかったですから蠅がたくさんわいていました。

（奥田）当時の校長先生がこの後片付けを、小学校の生徒にさせておられました。

シラミのわいた枕やござなどを子どもがかたづけたのですから、子どもにシラミがわいて家じゅう大変でした。

若い人々に伝えるのが責務

庄原市 伊達 ハルミ

警戒警報発令、お食事に行く。

私たちは、千田町一丁目の陸軍病院に看護婦生徒として入学し、勉強、実務に一生懸命でした。朝食を済ませから、帰ってきて机の前に座ったとたん、「ピカッ」と光ったのです。

「助けてー」と叫ぶ声を耳にしながら、真つ黒な中を一生懸命もがき、やっと立ち上がり、声のする方へ向かいました。自分は死んではない、やっとな、ここまで来た、すこしづつ明るくなり防空壕の中、友達も二人いました。

「どうしよう、いつまでもこうしてはいけない。」と思ったので、穴から出て履物を探し、靴を履いて川端のほうへ向かって一生懸命歩いていきました。

馬が四頭、道端に倒れていました。火は、どんどん延焼してきます。家がつぶれた中で子どもが泣きさけんでいました。母親が「だれか助けてー」と泣き叫びながら家のまわりを回っていました。この光景を今も忘れることができません。

足を引き摺りながら御幸橋にたどり着きました。四方が火の海でどんどん燃えてきました。トラックが人を乗せてきました。兵隊さんが降りてきて「安全なところに行くから、乗れる人は乗りな

い。」と言われました。私は歩けないので、友と別れてトラックに乗りました。トラックが着いたところは、宇品港でした。ここから船に乗りました。船は満員で腰を降ろすことも出来ませんでした。乗っている人は、みんな、黒い顔をして男女の区別がつきませんでした。

異様な臭いがして、誰も口をきく者はありません。とても長い時間のように思われました。港につきましたが、港には足の入れ場のないほどでした。

私は助かったのだ、歩ける、死なないぞ、家に帰る、帰りたい、家の者は私を待っているだろう、一日でも早く帰りたい、こんな思いが強くなりました。

女ばかりの兵舎に連れてこられました。ここは、外見では重傷者はいないように見えました。満員でしたが、少し間がありましたので、そこへ座り込みました。

私の足の血は乾いていました。靴を脱いで見ると血がかかるとたまっていました。隣におられた娘さんが静かになつたので、よく見ると死んでおられました。兵隊さんが死体を取りにこられ、線香をたかれました。なんとも言えない線香の匂いでした。

その匂いで気を取り戻して外に出て歩いたら、兵隊さんが患者の治療をしておられたので、私も頼んで包帯を巻いてもらいました。そばにおられた看護婦さんが「早く良くなって手伝ってください。」といわれたので本当に嬉しかったことを覚えています。

包帯をしていると、歩きにくいようでした。男ばかりいる兵舎の前になると、うなる声叫び声、わけの分からないことを言っている者など、そして、いたるところに死体が転がっていました。まさ

に、地獄のようで目をそむけたい光景でした。

こうして、歩いていたらいつのまにか防空壕の前まで来ていました。するとまた空襲警報がなりだしました。急いで兵舎に帰ってみると、娘さんが「空襲！ 空襲！」と言いながら部屋中を駆け回っておられました。恐ろしくて気が狂っておられました。

外に出てみると、兵隊さんが、オムスビを配っておられたので、私も三個もらって食べました。玄米メシでも大変おいしく食べました。

次の日からは、一日に一食は食べることができました。そんな日が何日か続き、やがて食べ物がないくなりました。

そこで、似島から食事のあるところへ行くことになりました。他へ行く希望者は係りのところへ行くように言われたので、行つて見ると小さな紙に名前を書いたものを渡されました。「これを無くしてはいけません。宿に着いたらこれを見せて泊めてもらいなさい。」といわれました。兵隊さんが迎えにこられました。兵隊さんが言われるまま船に乗り、自動車に乗り換えて目的地に着きました。部屋には患者さんがいっぱいでした。

朝、起きて三人で顔を洗いに出てみて、泊まったのはお寺だったことが分かりました。

横に川が流れていたのでも顔を洗って服の袖で拭いていると、「ハルミ！ ハルミ！」と呼ぶ声がしました。声の方に行つて見ると私の父でした。父は近寄ってきて、私を抱いて泣きました。私も父の胸に抱かれて大きな声を出して泣きました。父は、三日三晩、飯盒でご飯を炊き、草履を履いて私を捜

してくれたのです。

父は、歩けないなら、おぶつてやるからすぐ帰ろう、と言いました。私は、自力で父の後をついて二時間、山道を歩いて駅に着きました。汽車に乗りました。汽車が動き始めました。

生きていてよかった。嬉しくて、嬉しくて、涙が止りませんでした。そのときのことを今も忘れることができませぬ。二度と戦争があつてはいけない、若い人に当時のことを伝えなくてはいけない。

これが私たちの責務であると思います。

こどもたちに話つづけた被爆体験

三次市 山本 テル工

広島に原子爆弾が投下されてから既に五十有余年も経っています。今、頭の中に残っているままを筆にとりまとめてみます。

私は、昭和二十年四月、広島第一陸軍病院看護婦生徒隊に入隊しました。女性でありながら、大変な教育内容を身につけていました。

四月月たった八月六日、午前八時一五分頃、基町上空より世紀の悲惨事が頭上炸裂しました。原子爆弾の投下です。

前夜、一晩中、敵機が来襲したので防空壕に出たり入ったりしました。朝方になって制服を身につけ靴まで履いたままベットに横になりましたが、眠れぬまま起床時間がきました。

いつものように、朝食を済ませて一息しながらベットの上に前日購入した缶詰のレットル紙を広げました。このレットル紙は、勉強するとき使用するノート代わりのもので、字品の缶詰工場までに買いに行ったものでした。当時、このレットル紙は貴重で漸く手にした紙なので嬉しくてたまりませんでした。

その時でした。ピカッと光りものすごい爆風とともに肌身を劈く感をおぼえました。宿舎の建物が頭から身の上に崩れ落ちてきました。その時、異様な臭いとともに目にしたのは、橙黄色の煙でした。ガスを散布されたのではないかと思いつつ呼吸を止めながら顔に両手を当てて時間が経つのを待ちました。

顔面からは多量の出血があり、口唇は裂傷し、前歯奥歯などガラスの破片で抜け落ちていました。見る見るうちに顔全体が腫れ上がりました。両手肢にはガラスの破片が入り込んでいました。下肢足部は、光線による火傷がひどく、歩行が困難でしたが、とにかく現場から早く離れる事を一番に考えました。そして、はだしのまま川土堤を這い上がり、太田川に滑り込むように入りました。

水中は、気持ち良く足の痛みを和らげてくれました。太田川はたくさんの人で芋の子を洗うようにごったがえしていました。上流からは、死者が次々と流れてきました。その時、私たちの婦長の言葉が大きな声で聞こえてきました。それは、これまで勉強してきた事を今日、しっかりと発揮するようにとの声でした。周りの人たちに元気を出すように声をかけながら、三篠橋の下まで逃げた時、黒い雨が降ってきたので、休み、再度手をつなぎ水の流れて転倒しながら上流へと歩きました。

漸く夕方になり戸坂小学校までたどり着くことが出来ました。小学校には、すでに傷ついたたくさんの方が集まっています。私は、校舎の中に入ることができず、校庭のさつま芋畑で足を止めました。夜になって眠るために、芋のつるの下にもぐりこんで寝ました。

明朝、トイレに行くこともむずかしく、溢れるほどの死者の人々の中で動くことも出来ず、一番困ったことでした。

口唇が裂け膨れ上がっているので、おにぎりの食事が食べられないまま、空腹に耐えて三日が過ぎた時、三次方面に行く人は駅まで歩いて汽車に乗りました。

車中は、席に着く人、立っている人、通路に横たわる人、ほとんどの人が火傷を受けていて、傷口には白い蛆が湧き、異様な臭いがしていました。皆な無口でした。

いろいろな態勢で戸坂駅を出発しました。途中の各駅では、たくさんの人々が麦茶や梅干おにぎり等を持参してやさしい激励をいただきました。駅で初めて見る被害者の火傷や外傷の余りの深さにびっくりされていました。なかには、泣きながら接待してくださったことが今も忘れることはできません。心から感謝したものです。

駅に着き、病院に収容されましたが、毎日たくさんの人々がなくなりました。ほんとうに悲しい毎日でした。

病院で治療を受け始めてから二十日くらいして、漸く母親が私を見つけてくれました。母親は私を探しに広島まで出かけ、汽車で運ばれたことを知り、病院まで来てくれたのです。生きていられたことを親子で喜び合いました。

わたしは、血と灰もぐれの服を着たままだだったので、母は下着を脱いで着せてくれました。それから、整形手術などしていたいただいて外傷も治癒した後に我が家に帰りました。

傷は治療しても原爆症らしき症状はひどくなるばかりでした。原爆症には毒だみが良いのではと家族は色々薬りを求めて看護をしてくれました。毎日、リンゲル注射のみで、あの時期、現在のような点滴があつたなら多くの人命を助ける事が出来たのにと思い残念でなりません。家に帰つた私は、毎日のように高熱に見舞われ、骨と皮になり、色々な余病と闘いながら、もう一度生きたい気持ちで神に祈りました。家族の看護も大変なものでした。

十一月頃には、毛髪が抜け出し、突然、鼻出血が多量にあり、その後、高熱が下がり出し快方に向かいましたが、一人で生きられる状態になるまで一年はかかりました。

その間、医療費は多大な額だったと聞いています。白血球が普通になるまで四年くらいかかったように思います。ようやく元気になった時、就職もままならず、入院して色々治療をしながら勤務するなど、多くの方々から支えられ現在に至っています。小学校に勤務していた時は、修学旅行などで、夜、就寝時刻になつてもなかなか眠らない児童たちに、毎年のように原爆について話しました。昔の話をするなかで、現代子たちは分かってくれるでしょうか。物資の不足など現在では考えられませんが、興味深く質問する子どもたちは、何時も同じで、どうして戦争になったのか、ということですが、一応、知っていることを話して納得してもらいますが、当時の日本の状況など現代子にはむずかしいように思います。

お金持ちの日本国であるような感じを持っている子どもたちに色々話をすることのむずかしさを痛切に感じていました。

最後に、缶詰のレットル紙は苦勞して手に入れたのに、一枚も使用しないまま、あの日の原爆の灰

になってしまいました。何年たっても忘れることができません。

広島救援動員者の見たヒロシマ

— 山内の老人クラブの報告座談会から —

出席者 田畑伊佐夫さん 藤谷 得一さん 藤井 清一さん 藤高 忠雄さん 黒瀬 義明さん
田丸権九郎さん 伊藤 西夫さん 三上 一郎さん 広安 藤一さん 土井 覚一さん

司会者 曾根 恵子さん

藤高忠雄さん

(挨拶) 皆さんお忙しいところお集まり下さりありがとうございます。社会福祉協議会より各単位老人クラブに録音テープを寄贈しております。これの有効使用につきまして色々と考えてみましたが、私たちがかつて警防団員でありました当時、太平洋戦争の最中、あの恐ろしい原子爆弾が昭和二十年八月六日の朝、広島市の上空からB29によって投下され、二十数万の犠牲者と一瞬のうちに広島市全域が灰燼とかし、国際法上許すことのできない残虐きまわりない行為が行われました。

その直後皆さん方とともに非常招集を受けまして、いち早く出勤し、あの恐ろしい惨状を身

をもって体験して下さったのですが、こういった方々のご参集を願いまして当時のことを色々と思ひ出し、再度当時のことを振り返ってみたらと思うのです。皆さんよろしくお願ひいたします。

(司会) 焼け野原の整理に行かれたのだそうですが、どなたとどなたが行かれたのでしょうか。

(伊藤) 尾引では田畑伊佐夫さん・黒瀬義明さん・藤谷得一さん・藤井清一さん・藤高忠雄さん・田丸権九郎さん・伊藤西夫さん・三上一郎さん・広安藤一さん・土井覚一さん・吉川清一さん・下源一さん・山中勘一さん。下村で土肥琢治さん・竹下静さん。平田で武田鷹登とさん・安好正章さん。山王で山田光一さんが行かれました。

(司会) お名前を伺いますと、尾引と平和町の方ばかりのような気がしますが、何か事情があったのでしょうか。

(藤井) それは駐在所に連絡がありましたから、駐在所が近いというような関係から田畑へ連絡があり、田畑から私の家：私の家からよそへ：というような連絡の方法だったため、尾引や下村の人が多かったのではないのでしょうか。

(司会) 今頃とは全然ちがっていたと思いますので、当時どんな格好でどんな物を持って行かれたのかお話ししてみして下さい。

(藤井) 警防団の服装をして行けということはありませんでしたが、あまり急なことで夜でしたから着の身着のままで行かれた人もありますし、早く聞いた者は少しは支度をしたり米を持って行けとい

うこともありましたが米を持って出た人もあるし、みんなが一定ではありませんでした。米を持って行かれなかった者もあるし、スコップみたいな物を持って行った人もあるし、一様に持っていませんでした。

(司会) 行かれたときは今のようにバスなど無かったと思うのですが何に乗って行かれたのですか。それから広島に近づいてびっくりされたと思うのですがその時の様子をお話し下さいませるか。

(藤高) 役場に集合して行きましたが、その時刻が深夜一二時前でした。集まっていたのが尾引の人や下村の人でした。そのうちに当時の警防団長の梶田さんがおられましたので、そこへ庄原からトラックがまいります、さあ乗ってくれというようなことで急いで乗ったようなことでした。その時に、蠟燭が二本ずつと乾パンでしたか一包みもらって行きました。

行く途中、車がパンクして止まっておりますたら、たぶん東の警防団の車だったと思います。が追い越して行きました。

上根峠にさしかかりましたときに夜が明けたようなことでした。そこを過ぎまして行っておりますと、罹災者の人が、顔にメリケン粉（小麦粉）をつけたように真っ白い顔をして、服も夏のこと着（下着）でしたがぼろぼろに破れて非常に惨めな哀れな姿で帰られていたのでびっくりして肝を抜かれたようなことでした。そういう人がまただんだんと多くなりました。

可部の警察に着きましたときには警防団の人が竹槍で前の道に四列に並んでおられました。可部の警察に途中寄れということでもよらせてもらいましたが、所長に会いましたところ所長

がつまりながら話されるので、何を話しているか全く解りませんでした。他の巡査さんから、大芝に先発隊が行っているののでそこに行くようにと言われました。

広島市が近くなりますと一望に街が見えましたが、また二度も三度もおどろきました。まるで焼け野原で建っている物といえば鉄筋コンクリートの建物の外枠だけが残っている。そして大きな倉庫だったかと想われるような物がまだ煙をはいておりました。周囲の山は焼けるがままだに煙をたてていました。そのような状態で一望にみわたすかぎり何も残っていないような状態でした。電車の燃え残りや焼け落ちたミシンの台だけが残っているような恐ろしい姿でした。そのようなことで大芝に着きました。

(司会) それではほんとうの焼け野原の中でどんなことをなされたのですか。そこをお話ししてください。

(藤高) 大芝に着きましたらもうたくさん集まって大隊から中隊、小隊、各班に別れて作業を行いました。私たちが行ったのは大芝から横川にかけて、その付近一円の作業でした。まず道路を切り開くことをやりました。

私たちが行ったのは大芝の端の方でしたから家はまだ半壊したような所があったり電線は「そうめん」を下げたようになっていて道路がどうやっても通ることができません。そういう道あけをここからここまでをどの班がするというようなことで、そこを開いて一応作業が済みますと今度は、まだ息がある罹災者を担架に乗せて収容所まで運びました。それが一段落しま

すと検死を受け、亡くなった人の死骸を一方所に集めて火葬にしました。以上のようなことをその区間で済みますと次の区間へ移動していったのですが、後のほうでは仕事も変わってきましたし、みんなが別れて仕事をしました。

(司会) それではご飯などは夏のことですしどうされたのでしょうか、三度三度たべさせてもらったのでしょうか。

(土井) 食事は到着して色々な様子を聞かせてもらってから、持っていた弁当を食べました。次の日の朝からは持参した米をむすびにしてもらって食べ作業をしました。三度三度の食事も二度ぐらいでむすびをもらって食べたこともあります。当時はびっくりして食事もそうたくさん食べるような気分になりませんでした。

(司会) それではおかずはどんなだったのでしょうか。

(土井) 塩むすびでおかずは別にもらっていませんでした。むすびも三度三度はもらって食べずに乾パンをもらって食べました。焼け野原に行っておどろいたものですから、食事はもらってもだんだんにそうたくさん食べる人もいなかったので。

(司会) 家が全然なかったと思うのですがどこに寝泊まりされましたか。

(田丸) 大芝へ行きまして寝泊まりしたのは、夜は敵機が来て退避せよということがありまして、防空壕が道路の下に掘ってありましたが、その下へ入ったり、電柱をたくさん積み重ねてあったのですが、その下へもぐりこんで寝たり、夜を明かしました。

(司会) ほんとうに無惨なことが色々判ってくるような気がするのですが、ほんとうに皆さんは難儀(苦勞)をされてその時のことを思い出せといわれても、私は小学校の六年生だったと思うのですが、あくる日、小学校へ焼けただけの人に来られたのですがその姿を見ただけでも私たちはびっくりしたのですから、皆さんは現地に行かれたのですからもの凄かったと思うのです。色々なことがあったと思うのですが皆さん一言ずつ感想をお聞かせ下さい。

(吉川) 私は横川の学校の校庭に行きました。そして軍隊の防空壕の中へ入って子どもを二人抱えて死んだ女の人を出して校庭に三つ穴を掘って焼きました。焼き物をを一カ所に集めて積んで、死んだ人を並べて両方から枝をつめて、上から石油をかけて鉄板で覆って火をつけて焼きました。そして、それが終わってから三篠の公園の土手に帰ってご飯を食べて、その晩は一晚寝たやら起きていたやらわからんようなことでした。

(田丸) 私は横川へ行きまして横川の防空壕に入りまして、そこでガスを吸い込んだのだと思います。そこを出まして昼過ぎから体が苦しくなりまして休んでおりました。交代が来たので帰れということがありまして帰りました。帰ってから熱が出て四十日あまり寝たのです。その前は、あちこち行きまして火葬をするための釜を一間半くらい土を掘りまして、そのうえにあちこちの焼けすりを持つてきて重ねてその上に死人を三段ぐらいに重ねて焼きました。私は釜をつく仕事ばかりをしていました。

(藤井) 私は、みんなとは仕事違って罹災者の転出証明の手続きをしに行きましたから、死人を焼いたりはしていませんが、たくさん死んで、夏のことですから、口などから、蛆がたくさん湧いてそれはふためと見られないような惨状でした。大変な死人でした。ほんとうに見ていない人には話ができないようなことでした。私は死人を焼いたりしませんでしたが、他の人はずいぶんたくさん死んで焼いたりされたようです。

(伊藤) 私は死骸を焼く作業へ二日間ほど手伝いをしたわけですが、時節柄、夏のことから死骸の処理が湧いたりしたのを見て気持ちの悪い思いをしたのですが、焼き残りを積み重ねて死人を三段から四段重ねにいたしまして、一日三百人〜四百人ぐらい焼いたと思います。この死骸の処理につきましては未だに脳裏に残っています。焼けただれてふくれて、着物をみれば女の人だということがわかったのですが、足が焼けただれて歩くことができずに、「おじさん助けてくれ；助けてちょうだい；」両方の手を合わせて、這い寄るようにして救いを求めるのですが、こういった人をいちいち助けていたら仕事にならないので放っておくしかないだろうということ。で次の仕事に移ったのですが、その時のかわいそうだったという気持ちが未だに忘れることができません。

かわいそうな話や残酷な話を聞くときに、そのことをいつも思いだしてかわいそうなことをしたということが後悔として残っています。

(藤高) 原子爆弾が落ちた当時、徴用や学童の勤勞奉仕で動員されたこともあって、原爆が落ちたときも学童が本川の橋の下で、たくさん死んでいたのですが非常に哀れに思いました。幼い子ども

もが犠牲になった様子は非常に涙ぐましいものでした。作業をしておりますも罹災者の家族の方がさがしに来られるのですが人相が全く変わってしまっていて誰かということがさっぱり判らないと、みんな帰って行かれました。

私たちがちょうど段原の防空壕だったかと思うのですが、きれいな防空壕で、中にすのこが敷いてあったのでそこで昼休憩をしました。そこで隣の防空壕をみますと女の人が子どもを背負って、立ったまま真つ黒焦げになって亡くなっておられたというようなこともみました。いかに残虐であつたかということが思われます。

死人は校外のような竹藪や空き地のような所まで非常にたくさんの方がようやくそこまで行って倒れてしまい、命がなくなつたという方たちを見たり、町の中でも小さい防火水槽がありましたがその中へでも、頭を突っ込んで死んでおられる人がおられて、私たちは非常に気の毒に思いました。

(土井) 私が招集され三篠へ着いた朝でしたが、死人を整理するとき一人の女の方が気がふれたように悲しんでおられました。

昼の休憩の時、広島城の下のほうへまわってみました時には、道の両側に仮小屋を建てて、その中におられたのは兵隊さんばかりだつたと思います。真つ裸で、助けてくれえー、水をくれえー、と叫んでおられました。空を見上げてみますと広島城が崩れ落ちていますし、大きな松の木もひっくりかえりあの大きな石もみな崩れてしまつていたのです。

(司会) 本当に想像できないような無惨なことが二十五年前にあつたのです。今の広島が考えられないような気がします。

暑い最中のことですから色々困られたことがあつたのではないかと思いますがいかがでしょうか。

(田丸) 招集があつて行きましたが、私たちは広島に行くことになっていませんでしたから、何も持たずに着の身着のままで行きました。一番困つたのは煙草がなかったのに困りました。それで煙草を持つておられる人にちよつと一吸いずつ吸わせてもらつたりしました。

横川に行きました時に丁度、工兵隊の親戚の者がおりまして、何かあるというので十人ばかり集まつて何か捜しておりました。何も持つていませんでしたがお金を少し持つておりましたので従兄弟にあげてそこで別れました。

(藤高) 私は困つたというほどのことではなかったのですが、後で交代の者がくるからということだったので交代の人が来てくれず、一緒に行った人の中には、交代が来ないのなら抜けて帰ると言う者がでて、庄原の団長が私たちの最高指揮官でしたがその人にかけてあげましたが、私も恐ろしいから帰りたいのだが交代が来てくれないとどうすることもできないのだと言うこと、暇をくれそうにないので帰らないでくれ、とみんなに頼んで続けて居てもらいました。

そんなことが困つたことといえば困つたことです。不自由なことは音信があるわけでもないし、夜といつても蠟燭を灯すぐらいのことで灯りと

いっても一つもないようなことで困るといえば困りました。

ある民家の人が井戸に色々な物を入れておられたのを引き上げて欲しいと言われ引き上げましたところ、その中に鉄兜があつていらないのであげましようといわれて貰った者がありました。それを腰にぶら下げて歩いていたらよその警防団の人に、持ってきて置くことはあるが、持つて帰るといふことはなからうと言われそれを投げて捨てたというようなことがありました。

(司会) 広島へは何日ぐらいおられましたか。帰るときはどうやって帰られましたか。

(吉川) 四時頃暇を貰つて心やすい人が居たら面会をしないといふことで、みんなで練兵場のほうに行きました。そうしてみると大きな山がたくさんひっくり返っていました。

練兵の野原には大きな平の小屋をかけて、兵隊が死んだ者もおる、水を飲ませて欲しいと言う者もおりました。鉄道を通つて東の駅に行きました。東の駅に行くとき電車道には首を切つて投げた死人もおるし、駅には徴用のかかった若い人がたくさん亡くなっていました。

(司会) 今日は、皆さんの貴重な経験を聞かせていただきました。

これからは、二度とこのようなことのない、平和な日本になるために、お互いの経験をしっかりと語り継いでいくことが大切だと痛感しました。

今日は、本当にありがとうございました。

爆心地を走り抜けて

山内地区原爆被害者の会 会長 加藤 照明

広島气象台、北 勲主任技手(故人)の資料によれば、広島に原爆が投下された数時間後に、放射能を含んだ黒い雨が盛んに降る中を、米軍機が高度二〇〇メートル位の低空で旋回して来て、この痛ましい惨状を目撃していたことが、当時の乗員の証言によって明らかにされていると言われております。

当時の乗員は、ニール・フィッツ・パトリシア氏で、空軍大尉、テニアン基地に所属していて、昭和二十年八月六日、B 29のパイロットとして十人余りの乗員とともに、中国の天津で捕らえられたアメリカ人捕虜に、救護物資を届けにいき、テニアンに帰る途中、機内のラジオで、原爆が投下されたことを聞き、急遽広島に向かった。

広島到着は、原爆投下約五〜七時間後で午後一時〜三時ころであつたと思われる、当時広島では、黒い雨が激しく降っていたが、高度約二〇〇メートルから二七〇メートルで約二十分旋回、中心部は跡形もなく、黒い雨が降る有様は気持ちが悪くて寒気を感じるほどであつた。また、被爆者の姿を見たが、一人の老婆がとぼとぼ歩いていたのが、今でも心に焼き付いている。

また、原爆投下当日は、米軍が投下四時間前と投下後六時間後までの間、広島への入市は禁じられ

ていた、といわれていた。

このような事は、極一部の人は知らされていなかったのではないかと私は感じました。

急死を逃れて

山内地区原爆被害者の会 会長 加藤 照明

昭和二十年八月七日午前九時、私は、広島地方気象台の屋上で、風向、風速の観測をしておりました。

ところが、丁度、真下が江波の港で小さな漁船が数隻操業しておりましたが、ふと、気がつく。「パン！ パン！」という音が聞こえてきました。何かおこったのかと、江波港を見ると、驚くなかれ、「グラマン」（小型戦闘機）が漁船めがけて機関銃を操射していました。漁夫はすばやく船底に入ったのを目撃しました。

すると、また、一機、今度は高度二〇〇メートルくらいで、江波の高射砲隊（現在の江波公園）目掛けて飛んできて、私たちの方へ機関銃の砲身を向けました。急いで、室内に入りました。すると、高射砲隊が「ぼんぼん」と攻撃し始めましたので、急に旋回して廿日市方面へ飛び去りました。実に、急死を逃れてほっとしました。

私たちが推測するには、被爆者の生き残った人々を皆殺しにすべく、数機で来たのではないかと感じました。

急死を逃れて
広島を中心部を跡形もなく焼き尽くした上に、二十数万人という尊い市民の命を奪ったにもかかわ

らず、こうまで皆殺しにしようとするのかと思うと腹が立ってたまりませんでした。生き残った被爆者は、肉体的にも、精神的にも一生悩み続けて人生に終止符を打たねばなりません。再び、このような事がないように、即ち、永久に核兵器の廃絶と世界人類の恒久平和の確立を子々孫々に強く伝えていかなければならないと思います。

山内原爆被害者の会活動方針

核兵器の廃絶は、全世界の、人類の共通の願いです。

人類が生きていこうとするかぎり地球的な課題です。人類は核兵器と共存することはできません。ヒロシマ、ナガサキを経験した私たちはそのことを実感として世界で最も認識しています。

今年には被爆五十九周年を迎えます。

核兵器の使用は、生きとし生きるものを破壊し焼き尽くします。この破壊力は、国際間の紛争の解決として政治的に選択されて実行される戦争政策の限度をはるかに超えています。

私たち、山内原爆被害者の会は、核兵器の恐ろしさを認識してその利活用に対抗し、次の世代に被爆体験を広く継承することを通じて、核兵器を廃絶しようとする広範な認識を創造するために、次の活動を取り組みます。

- 一、被爆体験・被爆者救護体験を継承します。
- 二、核兵器を廃絶することを願い活動します。
- 三、会員相互の親睦を深め、助け合いの輪を広げます。
- 四、行政による原爆被爆者対策の充実を求めます。

庄原市山内で原爆慰霊法要



慰霊碑の前で、被害者の会の加藤会長(右)に当時の様子を話す小田さん

搬送元車掌涙の初参列

被害者の会 健在新たに8人 調

庄原市山内町で六日、原爆犠牲者慰霊法要が営まれた。原爆投下直後の九日、陸軍の臨時病院が開設された同地区に広島から被爆者を搬送した列車の車掌が初めて参列した。同地区の原爆被害者の会(加藤照明会長)の調べで、病棟で命を取り留めた百八十八人のうち、八人の健在者が新たに判明した。

病棟で亡くなった八十八人を引く慰霊碑前の法要で、車掌だったヒース絵講師小田貞枝さん(心臓)が、手を合わせて涙々と頭を下げた。「列車内は横たわった負傷者でいっぱい。水を下さいと制服を引かれて、どうすることもできませんでした。五時を振り返った。小田さんは六日から被爆者搬送に従事し「戦争に勝つまで、全身やけど

の負傷者を何度運び続けなければならぬのか。本当に戦争に勝つのか」と自問したという。列車が到着した近くの山ノ内駅にも訪れ「ここです。ここ。悲しみがこみあげてきます」と目頭をぬぐっていた。

法要には、地元住民や広島、福山市の二遺族を含む約八十八人が参列。主催した同地区社会福祉協議会の倉岡利光会長が「苦しみながらこの世を去った八十八人の安らかな眠りを祈る。世界に真の平和が訪れることを願う」と哀悼の辞を述べた。

判明した八人の健在者は、いずれも当時十五〜十七歳の女性。現在の中区西白鳥町にあった広島陸軍看護教育隊の同期生だった。広島県内在住者が六人、山口県内在住者が二人。これで所在が判明したのは大坂市の男性と合わせ計九人になった。

2003年(平成15年)8月7日 中国新聞より

五、被爆二世の顕在化と組織化に協力します。

おわりのことば

山内地区原爆被害者の会 事務局長 山本智洋

「葛城」三号（完結編）を発行することができました。多くの方々のご投稿、ご協力によって一号から三号までを発刊できましたことにたいして衷心より感謝し、まずもって厚くお礼申し上げます。被爆されたお方で、山内病棟に入院されて手厚い看病の結果退院され、今日まで生き永らえておられる方々を県内は勿論のこと、遠くは関西、岡山方面まで出かけて聞き取り調査や体験記へのご投稿をお願い致しました。面談した方々が異口同音に話されたことは、「二度とあんな悲惨なことがあってはならない、当時のことを口にするのが忍びない。」ということでした。

また、五十九年経た今日でも被爆者であることを隠したいという強い思いの方もありました。原爆の傷跡は五十九年を経た現在も深く深く残っていることを痛感致します。

広島・長崎を中心に核兵器廃絶の運動は世界に広がりつつあるものの、日本は戦後五十九年、平和の中に酔い浸り、とりわけ戦争体験の無い若者は、核の問題・平和の問題に無関心となっている者が多い現状です。

しかし、世界の現状からして今こそ被爆国日本、特に広島・長崎県民は原点にかえり核兵器廃絶の中核になり、平和な世界の実現に向けて努力しなくてはいけないと思います。

「葛城」発刊のねらいはそこにあり、特に、若い世代（小・中学生）に核兵器の恐ろしさを知らせたいという強い思いがあります。多くの小・中学校の平和教材に活用していただければ幸いに思います。この「葛城」が若者をはじめ多くの皆さんに読まれて、わが国と世界の明日を考えてみる一助となることを願い、おわりの言葉といたします。

2004年7月発行

発行 庄原市山内地区原爆被害者の会

広島県庄原市山内町813-4

山内公民館内

電話 (08247) 4-0451

編集 庄原市山内地区被爆体験記編集委員会

印刷 ㈱ニシキプリント